

## つぶやき

(amendment) 2012年10月27日 (吉井康雄)

突然、このつぶやきを書こうと思いました。それは何故か、沈黙は何も生まないということでしょうか？

大学ではまずお話しすることのない一人ですが、大学をまじめに心配していた一人として、経営学部の私が見聞きしたことをお知らせすることが、現在の経営学部の現状を理解していただくために、私の今できることかと思ひ、偏った情報かとは思いますが、その一部をお伝えしておこうと思います。

私自身は、経営学部には、北村先生にお声をかけさせていただいて、1997年にお世話になりました。

2003年以降から現在に至るまで、北村先生と反目していますが、それは、学部のあるべき姿をどのようにとらえているかによる反目であって、どちらも大学を大切に思っているからのことと理解しています。しかし、行動規範は全く異なります。

最初に、私がお世話になった1997年当時に濱本学部長から聞かされていたことからお話しすることにします。

濱本学部長は、土曜日になると、よく、コンビニで焼肉弁当を2つ買ってこられ、私との食事を楽しみに、学生運動の盛んな当時のこと、経済大学を導かれた諸先輩のお話しや学部運営などのお話しをされました。

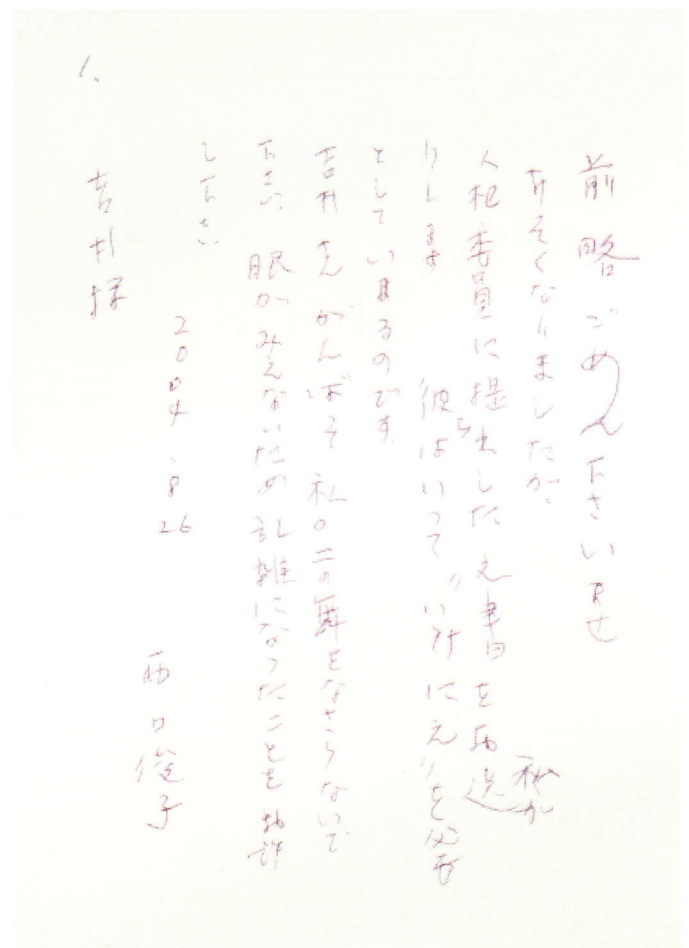
大学への理解と協力を求めるお誘いであると思ひ、先輩としての後輩へのバトンタッチをされているのだと理解してお話しをお聞きしていました。この時にお聞きしたのが、暴力行為に及んだ事務職員を退職させるために規程を変更し、その後、規程をもとに戻したというお話です(2011年11月の教授会で、北村先生と田中先生が「経営学部教授会決議方法」を動議し、採択されましたが、これも同じ手法です。すなわち、事前に知らされない人事案件を、教授会欠席者に事前に可否投票させることにより、人事案件を操作するというリスクが潜在する規程で、標的は多分私でしょう)。

それはさておき、濱本先生は学生の教育には大変情熱的でした。彼は、国内出張すると、必ずといってよいほど、その地域の地場産業や商工会議所などを訪れることを常とされている方でした。

この濱本学部長時代、経営学部は大きく2つのグループ、二宮グループと濱本・北村・渡辺先生のグループに分かれて穏やかではない雰囲気に含まれていました。

教授会は、いつも騒然として、学生委員をしていたOKI先生(現在、明治学院大学)を、彼が学生委員を務める約2年間、樋口先生が毎教授会、延々とかなりの時間、OKI先生を攻撃し続けていました。現在も、その理由はわかりませんが、よく、そのような攻撃材料を入手しているな、と恐怖したものです。なお、前後の様子のでわからない私でも、OKI先生に不手際があるとは全く思われませんでした。

今1つの出来事は、よく長期にお休みになる西口先生(インセンティブ・システム論)の退職勧告をめぐる議論です。1999年1月から3月は、西口先生の去就をめぐる教授会でした。本人を湯茶室に待機させ、担当科目をもたせないといった投票が行われたのが1999年1月の教授会で、退職勧告の投票は、当時、いつもの確に発言されていたHASE先生の強烈な反対で流れました。この結果、西口先生は学生相談員という立場にたたされ、講義を持たされない教員は教員ではないと、退職の決意をされ、人権委員会に西口先生にセクハラした教員を訴えられました。私自身、大学でこのような問題が何故発生するのかという背景も、セクハラ問題がどのように処理されて



いたのかも知りませんでした。ただ、学生へのセクハラアンケートに同一人物の名前があったという話は聞いていました。西口先生の実情を知ることになったのは、2004年に青水先生が私を人権委員会に訴えられたことから、正常ではないと感じられる学部の実態を知るために情報収集した結果、表にはでてこない部分があることを知りました。民間企業、研究所に長くいたためか、3現主義が身につけており、2004年8月に、西口先生のご自宅を訪問して初めて、彼女が1993年以降、悩み続けていたセクハラの実情、そして、彼女に対する学部の冷たい対応を知ることになりました。

このような問題をかかえた経営学部教授会でしたから、失望して他大学に移られる先生が出るのも止むを得なかったと思います。

広島大学の大学院に移られた早稲田大学で現在教鞭をとられているINOUE先生も、先ほどのOKI先生も、その後、同志社大学に移られたIMA先生も、その当時を経験されたお一人です。

学部運営に何か疑問をいただかれ、学部をどうすべきかとお考えになるなら、学部を去られた先生方に耳を傾けられるとよいと思います。去られた先生方は、正面からむきあえば、普通は口には出すべきではないお話しも語ってくれるのではないのでしょうか。自分の籍をおいた大学のためにきっと何か有用なお話しをされるとと思います。

それはさておき、北村先生はズーと法律の学部をおつくりになりたいという思いで、奔走されていたのでしょうか。その結果でしょうか、渡辺先生に近いグループとは袂を分かち、北村・二宮グループが形成されていきました。

1999年から始まる渡辺学部長時代は、私にとっては穏やかな春の日のような思い出の時代です。他学部の先生方とも親しくお付き合いさせていただき、公募入試の試験問題の作成、その後の打ち上げなど、充実した楽しい時代でした。

2001年、二宮先生が学部長になられ、その翌年、北村先生が2度目だと思いますが学部長になられた時から、経営学部の微妙な力のバランスは崩れ、反対の立場をとる教員への抑圧が北村・二宮・樋口のグループにより始まります。他学部の先生からNHK(3名の先生方の頭文字)と呼ばれるトロイカ体制の始まりです。

その火の粉が、ヨーテポリ大学のGRI研究所にいた私にも飛んできます。当時、二部の方向をめぐって議論が闘わされていて、私は、より専門性の高い知識を教えたいという気持ちからビジネススクールに近い夢をもっていました。

この時に、数名の先生方が自主的に、あるいは強制的に二部の担当を外れることになり、私は、私の意思を考慮することなく、外れる一人にされてしまいました。帰国後、すっかり変わった経営学部の教授会をみて、これではいけない、と判断して、学部運営を人為的に偏さないようにとの思いから、意見書を学部教員に文書で渡すことにしました。

あまりに強力なNHK体制と多数決でお決めになる現行の意思決定方法では人為的に偏さない運営は不可能と思いつつも、正しい規程の適用と議事録の残し方を、問題とみなせるケースをあげて提案しました。

正しい規程の適用では、ケースで示した青水先生の部分が2004年7月に名誉毀損で人権委員会に訴えられることになりました。私の主張は、長期に繰返しお休みになる、健康に不安のある先生の留学を認めることは、その主旨に反するというものでした。それはさておき、西口先生と青水先生のケースは長期に繰返しお休みになるころはよく似ていますが、西口先生は強制的に退職に追い込まれ、その後も繰返しお休みになる青水先生は北村・二宮・樋口グループの手厚い庇護のもとで今年3月に自主退職されました。

お2人にみられる不自然さは何処からくるのでしょうか。

教授会議事録の残し方では、「録音でも残すこと、議事録のサインは持ち回りにすること」であったと記憶しています。前者は、肉声が多く情報をもっていることから、教授会運営の適切さの保証になると考えたからです。後者は、教授会議事録のサインは学部長のみのため、議事内容のチェックが機能保証されない仕組みになっているためです。

人権委員会に名誉毀損で訴えられてわかったことは、人権委員会は前述のセクハラ問題以降、規程が変更され、他の権限が及ばない独立した組織になっていること、人権擁護と教育的指導の主旨にいささか疑問を感じる懲罰規程があることです。私のように懲罰の委員会が結成されますと、学部長などがその委員会のメンバーになり、悪いくと、教授会などが関与しない独立組織の懲罰規程により退職に追い込まれる可能性があり、人権を護る、守秘義務が課されているというキーワードは逆にブラックボックスで何をされるかわからないという不安を覚えた記憶があります。

人権委員会に影響をもつNHKグループが私を人権委員会に訴えた狙いは何処にあるのか、何故、懲罰規程があるのかと疑問に思いつつも、人権委員会が認めない弁護士をたてて自分を護ることに専念しました。春、夏、冬と、休みになると

人権委員会の質問を受けることとなり、その対応に追われ、大変疲れました。3年間続いた北村学部長体制のもとで、経営学部の地盤はしっかり固められ、2005年から2度目の二宮学部長体制が続くこととなります。学部から理事会には副学長・理事の北村先生、学部長・理事の二宮先生を送り出すこととなり、副学部長の樋口先生による、NHKといわれる独裁色の強いトロイカ体制がさらに続きます。

そのような体制のなかで、ドン・キホーテの役を演じ続けたのが私です。馬鹿な正義感がそのような行動をとらせ続けたのです。2005年3月の卒業認定の教授会の席上で、カンニングの手續きに問題のあるケース(2003年1月22日発生)について、MDE 学生委員長や科目担当の先生、樋口先生の文書をもとに発言しました。NHKグループへの問題指摘が教授会メンバーに改善を促がす警鐘になると思ったのですが、かえって私自身への攻撃材料を与えたことになりました。

2005年9月、他学部の先生方から“いよいよ真打ち登場”という言葉が囁かれた樋口先生に名誉毀損で訴えられます。この時の人権委員長は、名誉毀損の訴えの再現を適切に工夫し、周囲情報を集め、名誉毀損にはいたらぬという判断をくだします。これが、当時の人権委員長、事務職員、組合委員長を苦しめることになり、人権委員長は科目への圧力、事務職員は退職に、組合委員長は昇進の遅れとなってあらわれることになりました。

2005年12月16日の臨時教授会の席上、コースの必須科目を担当教員である本人に相談もなく「1コマ減らす」と樋口カリキュラム委員長が説明、二宮学部長からは「学部長要請」である、と。もっとも、少人数教育をという新基準適用のため、反論の余地はありませんが、必須科目としての学生への配慮は全く感じられず、選択科目にせよと発言、そのようになりました。この時期は大学と学生自治会とが激しくぶつかっていた時期で、12月9日の自治会のピラに、樋口先生の「不正行為処分取り消しのお願い」の文書とその当時の事実情報と思われる内容が掲載されており、その情報を吉井が流したものと判断されたのでしょうか、教授会の途中で学長に呼ばれてもどってきた二宮学部長が、吉井がもらした、と発言、犯人扱いされてしまいました。私はこのような行為はしておりませんが、逆に、そのような行為をした本人が何故問題視されないのかという疑問と、何故、学生委員会が判断した結論を、北村・樋口執行部が教授会でひっくりかえたのか、という疑問をもっていました。

理事会に吉井の調査委員会ができ、2006年1月に、理事会から吉井宛に質問状がきます。この時の学部出身の理事は北村副学長と二宮学部長です。今年の教授会で、この調査委員会がなくなったと北村理事から話があり、ホッとする一方、いつまで存続していたのか、個人的に知りたいとも思いました。

2006年10月27日の教授会で、渡辺元学部長がご自身の講義資料を配布し、二宮グループの教員評価制度のやり方に苦言を呈されました。昇進、給与などを視野においた評価制度であったと記憶していますが、二宮・樋口執行部に優良可にあたる可のレベルのスコアで評価された先生方の反発は大きかったと記憶しています。私は、評価制度は認めてもよいという立場で当時発言していましたが、執行部の意図は制度による教員のコントロールにあると感じられ、仮によい制度であっても運用する方によって諸刃の剣となるというリスクを感じていました。

丁度、今頃、学部長を選出する時期が近づいた教授会の席上、渡辺先生が北村先生の隣に座っておられるというめずらしい光景を目にすることになります。渡辺先生は何か緊張しているように感じられましたが、2007年は、渡辺・後藤・伊藤裕人体制となり、少しの間の穏やかな教授会となります。

翌年の2008年からの2年間、私の知るかぎり、第3次北村学部執行部がスタートします。

2008年5月、INO先生が中小研の委員を、もっとふさわしい先生がいるということで外されるというケースが発生します。北村学部長は途中変更もありうるとし、二宮先生は新しい学部長方針に従うべきと発言します。中小研の委員長は異議を唱えましたが、聞き入れるはずがありません。私には強者の論理と思いますが、どちらが正しいでしょうか、ご判断ください。

2009年11月の教授会で、YOSI先生の教授昇格人事で審査に入るか否かで票が割れました。2010年1月15日の教授会で、YOSI先生は昇格審査を自ら辞退されます。3分の2の教授の可がなければ教授への昇格が認められないためでしょう。その後、愛知大学へ教授として栄転されることとなります。

2010年から現在まで、北村先生の影響が極めて強い、井形・池島体制となります。



2012年1月27日の臨時教授会では、ある教員から、カリキュラム委員会が本人の了解も得ずに…、という発言をされました。1教員では学部執行部に疑義を訴える、あるいは意見することが難しいという局面を垣間見られたと思います。多くの先生方の記憶に新しいこのようなケースについて、どちらが正論かは私にはわかりませんが、私が経験してきたアカハラ(相手はそう思っていないと井形学部長は話されていますが)では、直接、本人が手をくたすということをしてきません。必ずといってよいほど、巧妙に小回りの効く操作可能な組織や規程の運用などを使って、プレッシャーをかけてきます。したがって、1個人では対応が困難の一言に尽きます。

私のほうに話をもどします。

2012年4月6日の教授会が始まる前に、学部長から特任を辞退されるのでしょうかというお話が突然あり、早速始まったかと思ひながら、その日の教授会の席上、特任を辞退する意思はないと述べました。

しかし、その後、カリキュラム委員会では吉井の特任外しが進められているという噂が伝わってきました。

そして、2012年10月15日、学部長による、特任教員辞退要請がきます。翌日には学長と話しされ、学長の了解をとりつけたとして、推薦委員会には学部としては提出しないというメールがきます。

以上のつづきで、大変な学部だなど思われたことでしょう。ただ、言われたようにしておれば問題なかろう、という立場を踏襲されても、私のようなケースに巻き込まれるリスクが常にあるとお考えになったほうがよいと思います。

それは西口先生の言葉にある“いけにえ”が学部の教員を操縦するために必要なのでしょう。

なお、西口先生の退職におよぶ当時の出来事は、セクハラで訴えられた現職の教員が一番よくご存知のことと思います。

このような問題をなくすには、経営学部の皆様がどのような学部でありたいかにかかっていると思います。

まずは先生方一人一人の意識改革です。一番立場の弱い任期教員として採用、あるいは再任された先生がたにお話しします。採用していただいたのはご本人の実力を学部が認めたからであって、特定の教員の方ではないと理解することです。今一つ、ご自身の将来の環境を形成する責任は自分にあり、研究と教育などの活動に専念できる、そのような環境を自らの強い意志でつくる努力をすることです。

NHKグループから投票などの依頼が来るでしょうが、判断すべき情報が不足している時は、周囲の方々から積極的に情報収集し、信念をもって行動されることです。毅然とした態度がこれらのプレッシャーを撥ね退けることでしょう。

繰り返しますが、あなた方の身分は大学が保証しているのです。その保証されている間に、思惑に左右されない、強い意思決定をすることが、結果として、あなた方の競争力を高める方向に時間を割くことができ、身分の保証につながり、経営学部もよい方向に進んでいくと思います。

経営学部長の選挙があるようですが、これについて、次のように発言しておきます。

良いリーダーを選ぶことです。私のつづきでもご理解いただけたと思います。

他学部では、学部長をそれぞれの立場から学部へ貢献できるように調整されていると聞きます。その選出方法の是非は問いませんが、どのような学部長であれば、バランスのとれた学部長(学部の革新と維持、教員の成長と学生への教育の成果の追求の観点で)として行動していただけるかをメインにおいてお決めになることです。

私は、学部で孤立した立場に2003年以降おかれていましたので、学部事情にはうとく、発言する立場にはありませんが、次の提案をします。

第1段階は、学部を改革しようという強い意志のある先生を選ぶことが必須です。投票依頼のくる先生では、現在の仕組みが継続されるため、回避されるべきです。

第2段階は、意識改革された学部のもとで、経営学部をより魅力的な学部にするために、コアとなる先生を外部からお呼びになるのもよいでしょうが、該当する先生方は沢山おられます。ご本人はご辞退されるかもしれませんが、先生方の熱意で、そのような先生を選んでいただきたいものです。

⇒ 池島先生が次期学部長に選出され、北村先生擁する学部執行部が続きます。経営学部で生きることは難しいでしょう。

つづきもいよいよ最後にしようと思います。

今回の私の特任教員を認めない理由の1つに、経営情報学部の改組をあげられています。

経営情報学部が改組となったように、経営学部においても、吉井先生が担当する経営情報論や情報ネットワーク論などの情報科目の重要性が低くなり、カリキュラム委員会としては来年度不開講で一致していますから、吉井先生が特任を希望されても担当していただく科目はないため、貴方の特任を認めることはできません、と井形学部長が説明されています。

また、北村先生は、教授会の席上、特任教員を認める・認めないの決定は井形学部長、あなたにあるのですよ、これは学部の先決事項です、と繰返し述べる一方、決議したことに対する教授会決議の不可侵性を強調されています。つまり、他の組織の介入は許さないという強い意思表示をされています。

これに対して、私が担当する情報科目の立場から、反論しておきます。

情報が社会の仕組みを大きく変える起爆剤になっています。

それは無数に張り巡らされた目にみえないネットワークのなかを瞬時にしかも制御不能なほど行きかい、今まで静かであった人々が、自らの意思で行動するようになっています。

それは、既存の体系や論理では、もはやコントロールできるものではなく、情報を統制しようとする国の体制までも変える力をもっていることを理解する必要があります。つまり、社会システムのオープン化が従来のクローズドなシステムの閉鎖性を認めなくなってきたのです。

ですから、学部という閉じた社会で幾ら特定の教員が力を振るおうとされても、既に無駄なことなのです。

私の研究室の扉にかかっているように、公明正大に、透明な仕組みのもとで、お互いが対等であるという意識のもとでの協調体制が求められているのです。人事にまつわる駆け引きも、一昔前であれば可能であったことも、もはやそのようなことは困難となるでしょう。

私たち一人一人が、意思決定に必要な情報を検索する手段をもち、情報を受発信する手段と能力をもっているからです。その手段の行使はもはや誰も制御できないのです。学生も将来の学生もまた同じ手段と能力をもっているのです。

私たちの意思決定の1つ1つが学生諸君、さらには社会にさらされているのです。そこでは、学部の先決事項も教授会決議の不可侵性も過去の遺物となることでしょう。

公明正大さ、公正な論理、正しいとみなされる行動規範というフィルターが唯一のフィルターとなるのです。

以上が私のつぶやきです。

経営学部の発展は、先生方お一人お一人にかかっています。行動してください。大学、学部、学生のために！

備考：経営学部の現在に至る経緯をご存知ない方々に理解していただくために、私の目線から記述したものです。  
ご了解ください。